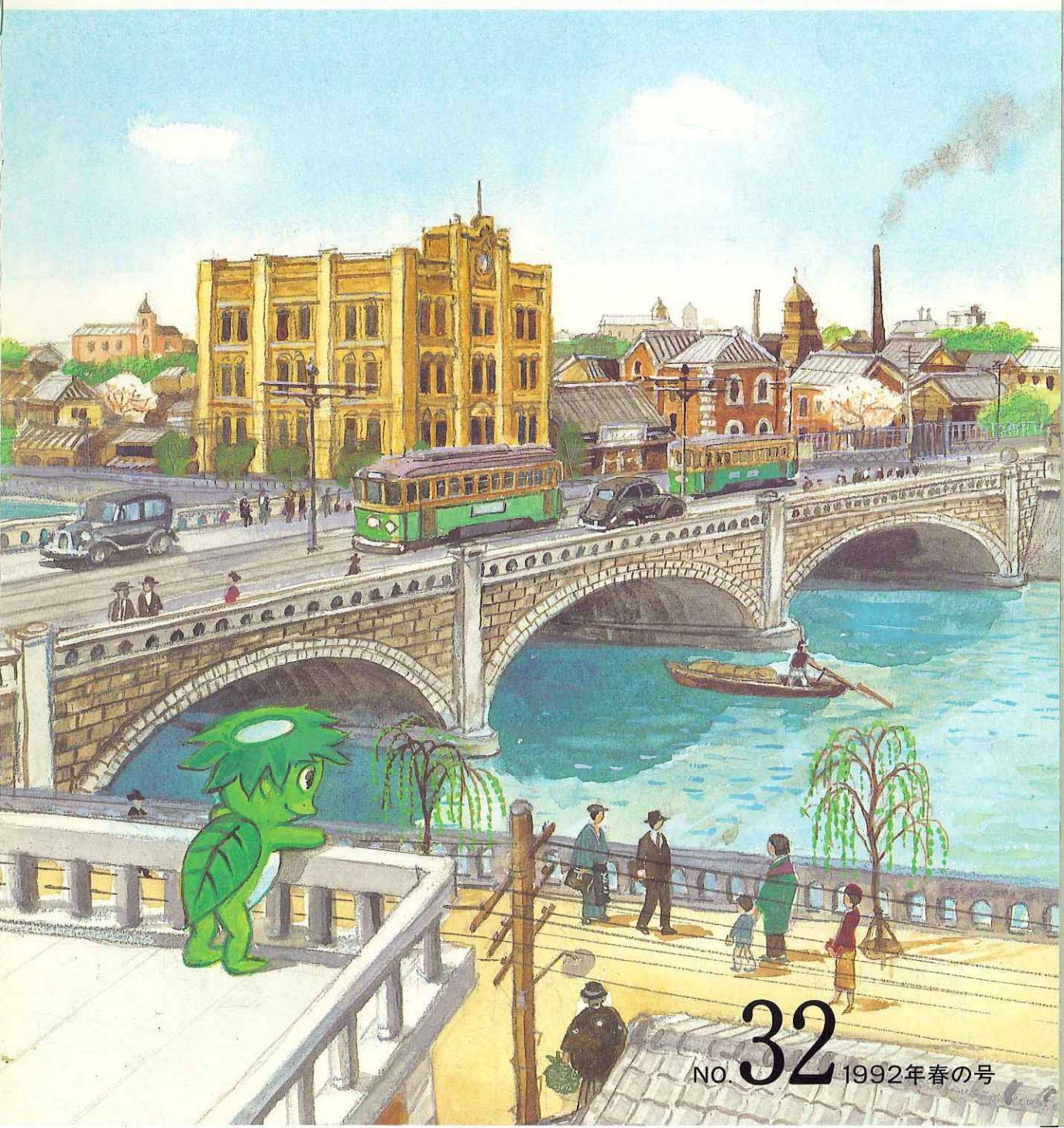


川の本

『川と人びとのくらし』—⑤ 大正から昭和へ、近代化と川の恩恵—



32

NO. 32 1992年春の号

大正から昭和へ一人ひとと川――

大正時代は、日本の近代化がやっと形を整え政治的にも経済的にも欧米諸国に近付いた時代です。大正デモクラシー運動とともに新しい市民文化が生まれました。

しかし、良いことばかりではありません。大正12年には関東大震災にみまわれ、昭和にはいつて、昭和2年には金融恐慌がはじまり、街には失業者があふれる不況の時代へとはいってきました。

さらに室戸台風（昭和9年）の大災害や東北の冷害など幾多の試練をうけました。

このような時代の好、不況の社会情勢の中でも、河川整備は、国の発展と人びとのくらしを守る事業として休みなくおしそすめられました。

大正時代にはいつて水の利用はふえてきました。

明治政府が掲げた富国強兵、殖産興業などの近代政策が軌道にのり、また大正時代にかけての飛躍的な発展をとげていた日本の国は、世界的な好景気にも恵まれ、工業が発達し都市化が進み人口も増えてきたのです。

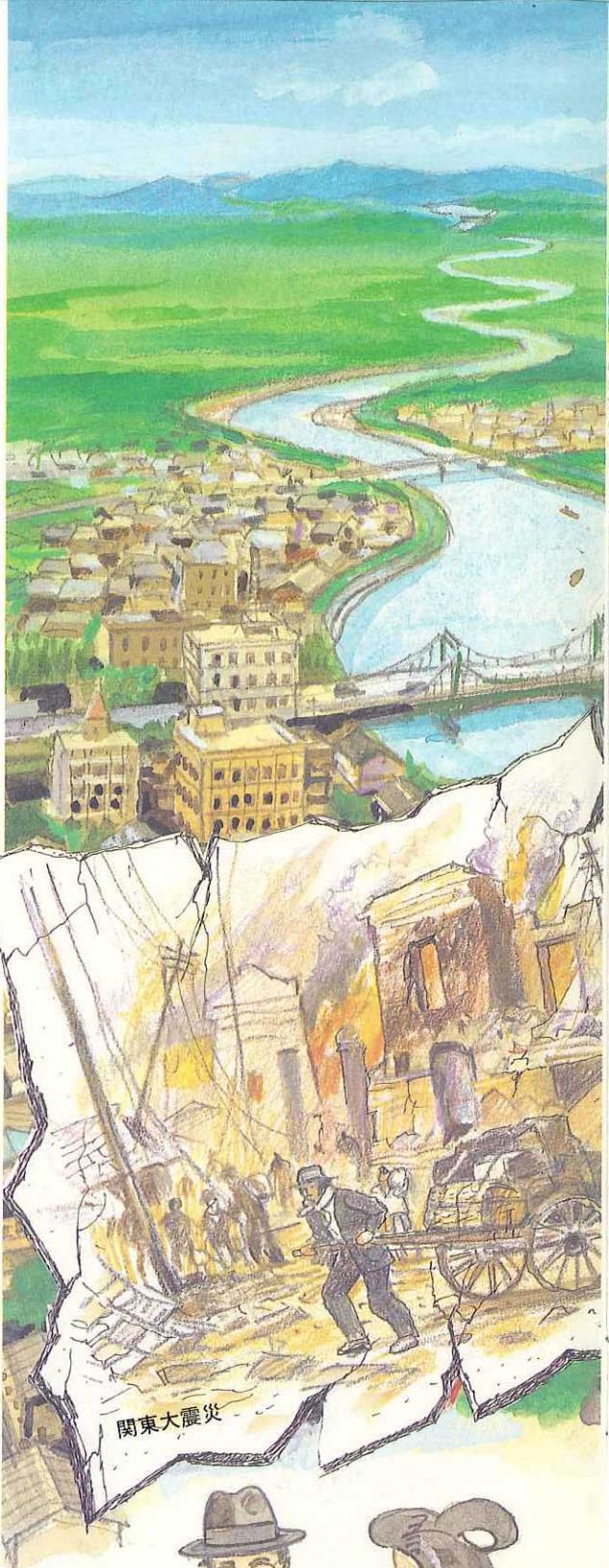
人口が増えると水田をふやしもつとお米を作らねばなりません。農業用水も以前よりしっかり確保する必要があります。

家庭や工場のエネルギーとして電気の普及とともに、ダムをつくり、水力発電所もたくさんつくらねばなりません。都市化が進み人口が集中すると、飲料水や洗濯などの生活用水も昔のように井戸や小川ではとても間に合わなくなります。

その上、昔にはなかつた新しい水、工業用水の利用が始まったのです。工業が発達するにともなって、それまでより多くの水が必要になりました。

このように水がたくさん必要になってくると、川を以前のままで利用していたのでは水がたらなくなります。

このようなことを、どうすれば解決できるかと、川の管理を受け持つ内務省（現 建設省）では、しんけんに討議して、治水と利水の事業をあわせて進めるための、河水統制事業が発足しました。



時代の進歩とともに
人のくらしも、服装も変わった
川も役目がふえる川の姿も変わる





ランプから
電気になって
一般家庭でも夜、本を
よんだり、裁縫したり
便利になった。

アメリカのT.V.A (テネシー・バレー・オーソリティ)

このころアメリカではT.V.Aが大計画を推し進めていました。この計画は、テネシー河と支川に数個のダムを建設して水力の開発をする、そして発電や灌漑に利用して農業、工業などを発達させる、治水に役立たせる、舟運を発達させる、さらにこれを中心に地域の総合開発をしようと言うものです。

スケールも、けたはずれの大きさで、ノリスダムでは、テネシー河を流れる水の一年間分を全部貯水することができる大きさですし、ボルダーダムはコロラド河を流れる水の2年間分全部を貯水できるものだそうです。この、ダムによる大規模な水資源開発は、世界の関心を集めました。

浅草～万世橋間 日本初の地下鉄開通(昭和2年)

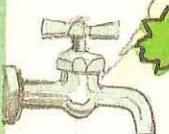
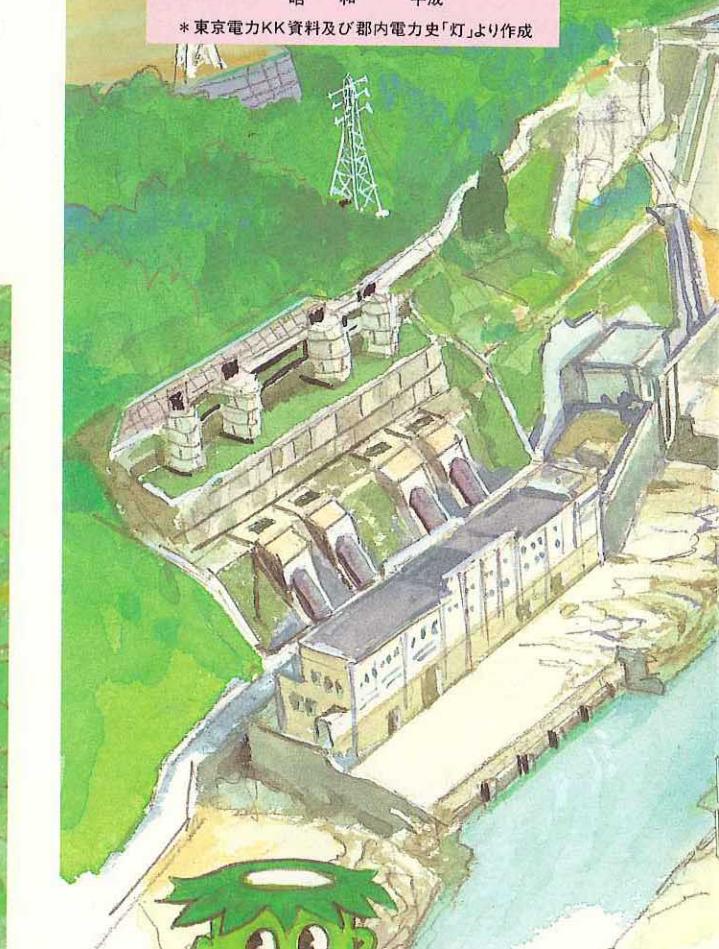
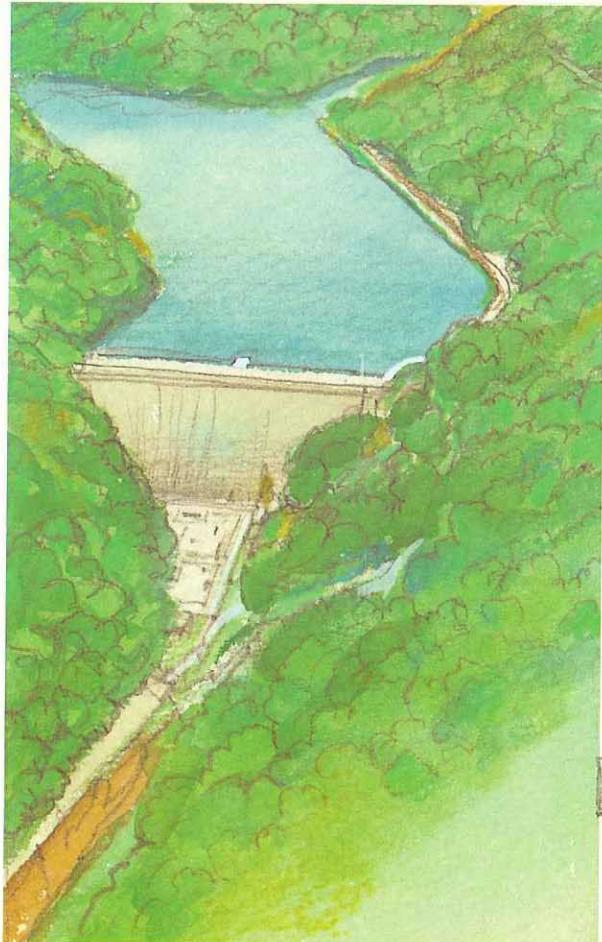
大ダム時代の幕開け

人びとの生活用水や水力発電のエネルギー源となる川の水は、大切な資源です。この大切な水資源もほっておいては、そのほとんどが利用されずに海へ流れてしまいます。そうした水を貯えておき、川の水が少ない時期にもじゅうぶん活用できるようにするためにダムはつくられます。昔のダムは農業用の溜め池などとして、土の堤でつくられた小規模のものでした。

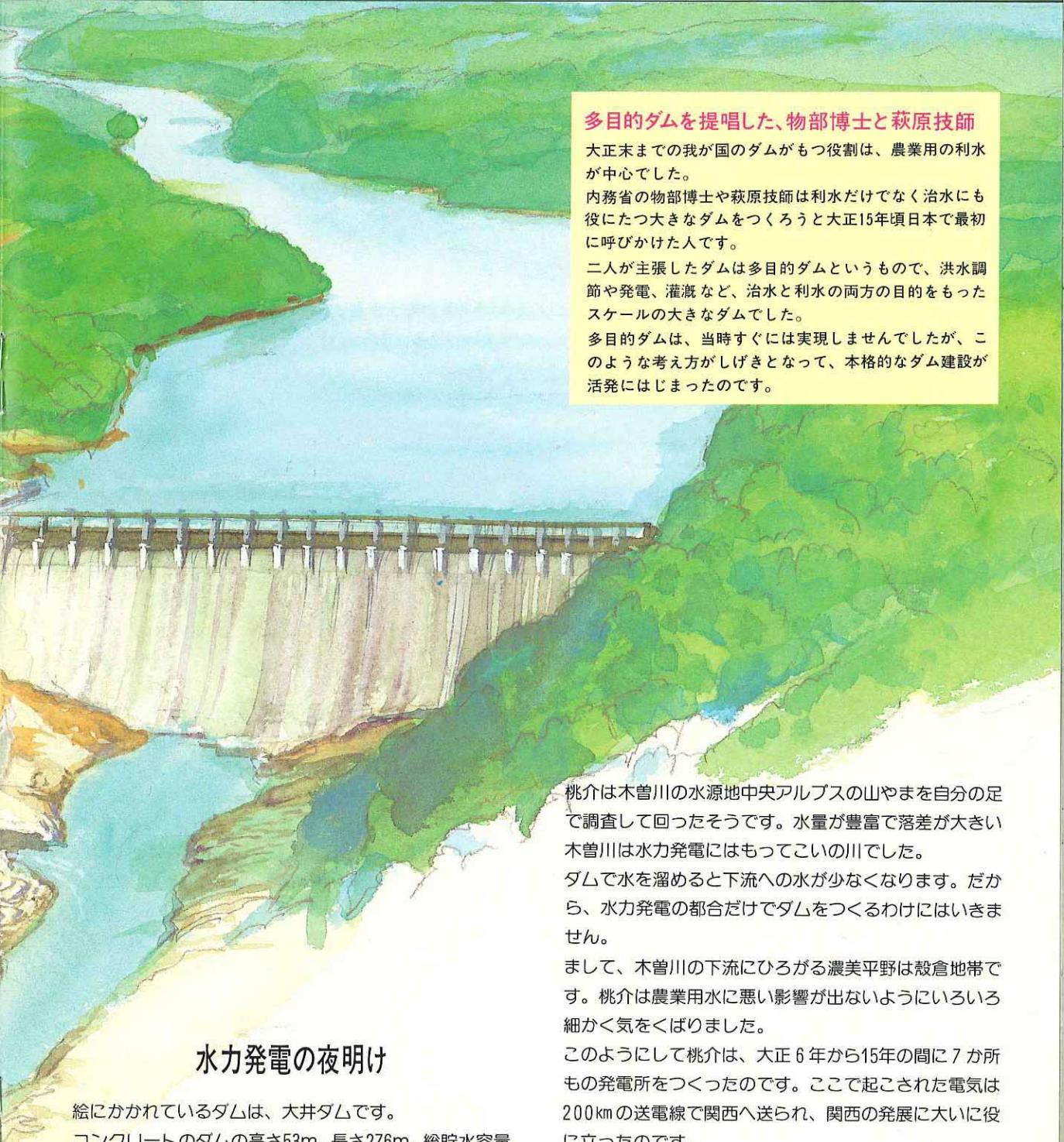
コンクリートの大きなダムは、明治以後になってからで、大正時代から本格的になりました。

日本で最初のコンクリートダムは、明治33年、神戸市の人びとの水道専用として建設された布引ダム（五本松ダム）です。ダムの高さは33mでした。

大正13年には、発電専用の大井ダム（高さ53m）がつくられましたが、これは当時としては画期的なもので、大ダム時代の幕開けを告げるものでした。



布引ダムは水道専用、
大井ダムは発電専用だ。
昭和30年代からは
治水と利水の両方を
目的とする多目的ダム
が中心となります。



水力発電の夜明け

絵にかかれているダムは、大井ダムです。

コンクリートのダムの高さ53m、長さ276m、総貯水容量2,940万m³、最大出力4.8万kWのこのダムは恵那市で木曽川をせきとめるような格好で建設されています。

「男伊達なら あの木曽川の

流れくる水 止めてみよ」

と木曽節にうたわれているように木曽川は水量豊富な大河川です。「この川にダムを造ってみせるぞ」と情熱をもやした一人の男がありました。

福沢桃介という事業家です。有名な福沢諭吉に見込まれて養子となつた人だけに、先を見とおす目と実行力のある人でした。

多目的ダムを提唱した、物部博士と萩原技師

大正末までの我が国のダムがもつ役割は、農業用の利水が中心でした。

内務省の物部博士や萩原技師は利水だけでなく治水にも役にたつ大きなダムをつくろうと大正15年頃日本で最初に呼びかけた人です。

二人が主張したダムは多目的ダムというもので、洪水調節や発電、灌漑など、治水と利水の両方の目的をもつたスケールの大きなダムでした。

多目的ダムは、当時すぐには実現しませんでしたが、このような考え方がしげきとなって、本格的なダム建設が活発にはじまつたのです。

桃介は木曽川の水源地中央アルプスの山やまを自分の足で調査して回つたそうです。水量が豊富で落差が大きい木曽川は水力発電にはもってこいの川でした。

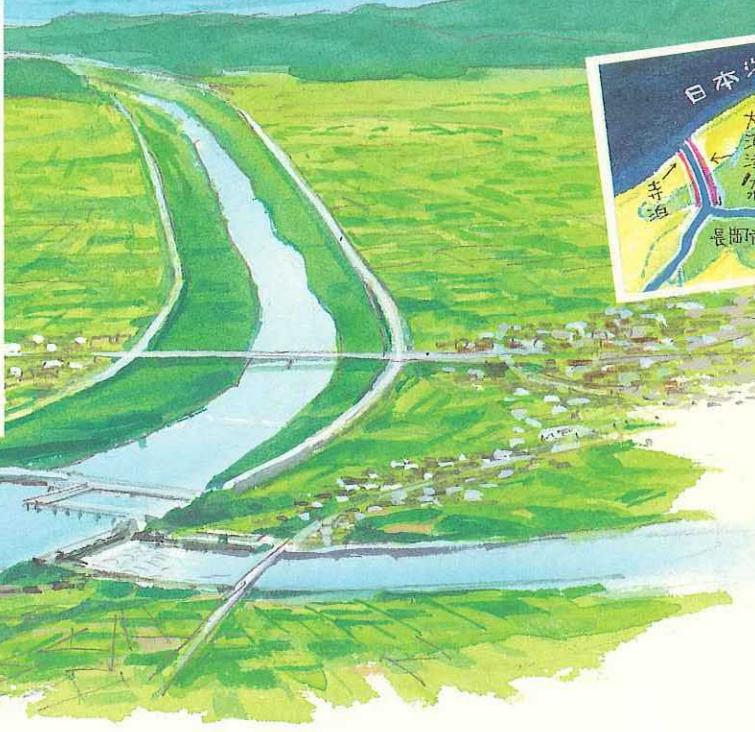
ダムで水を溜めると下流への水が少なくなります。だから、水力発電の都合だけでダムをつくるわけにはいきません。

まして、木曽川の下流にひろがる濃美平野は穀倉地帯です。桃介は農業用水に悪い影響が出ないようにいろいろ細かく気をくばりました。

このようにして桃介は、大正6年から15年の間に7カ所もの発電所をつくつたのです。ここで起こされた電気は200kmの送電線で関西へ送られ、関西の発展に大いに役に立つたのです。

電気は、まだまだ不足していましたから、発電用ダムの建設を望む声は各地であがつてありました。大正13年には帝釈川ダムが、昭和5年庄川に小牧ダム、昭和13年塚原ダム、昭和14年立岩ダム、昭和20年三浦ダム、といった大ダムがつぎつぎと建設されました。

治水と利水の調和をはかりながら、川の水を何倍にも利用する、これこそが水資源の開発なのです。ダムは水資源を開発するためにはなくてはならないものです。



明治—大正—昭和と受け継がれた 大河津分水と越後平野

新潟のお米と聞けば、誰でもおいしいお米のひとつとして思い浮ぶのではないかでしょうか。

ところが昔はまずいお米の代表だったのです。

“とりまたぎ米”といって、あんまりまずいので鶏まで食べないでまたいで行くほどだと言うのです。

それほどまずいお米がどうしておいしいお米の代表格にまでなったのでしょうか。

もちろん品種改良などいつも理由がありますが、ほかにも大きな理由がありました。

その説明には、越後平野と信濃川の関係を話さなければなりません。

昔の、越後平野は信濃川が乱流する湿地帯でした。当時の農家の人々は田下駄をはいたり、腰まで水につかって田植えをしなければなりませんでした。そんな土地ですから、まずくても水に強い稻しか育てることができなかつたのです。刈った稻を運ぶにも小舟を使わなければなりませんでしたから舟農業と呼ばれるほどでした。しかも3年に一度は水害があこり、そんなに苦労して育てた稻でさえ流されてしまうのです。ときには人の生命までうばわれました。

信濃川には大河津分水(放水路)があります。

放水路をつくることは、江戸時代から人びとにとつて、

なにも勝る悲願だったのです。

親から子へ、子から孫へさらに次の世代へと200年余り繰りかえされた請願がやっと認められ本格的工事がはじまったのは明治42年のことでした。

大河津地先の信濃川と日本海側の寺泊海岸までを結ぶ10kmの分水路の工事には、人力や馬車にかわる土運搬動力として蒸気汽船車が導入されたり、大型掘削機などがとりいれられて、働く人々を助けました。しかし決して楽な工事ではありませんでした。掘っても掘っても地すべりがあこる「化け物工事場」と言われた難所があつたり、分水完成の竣工式を行つたのも束の間、こんどは洪水を分水する自在堰が陥没するなど、さまざまな困難にありました。

働いた人びとは、のべ1000万人にもなったそうです。補修工事がおわり昭和6年の完成まで22年間の歳月が費やされておりました。

大河津分水路ができてから、信濃川ぞいに広がる27,300ヘクタールの耕地は、水害から守られ、排水がよくなり、沼のような湿田は乾田に変わりました。土地の改良もすすみ、人々はおいしいお米作りに専念できるようになりました。

おかげで昔にくらべ2倍から3倍のお米がとれる上に、おいしいお米の代表格にまでなったのです。

それだけではありません。大河津から下流の新潟市などをふくむ483km²もの広い地域が、水害から守られ、安心して住めるところになりました。



国の発展と川

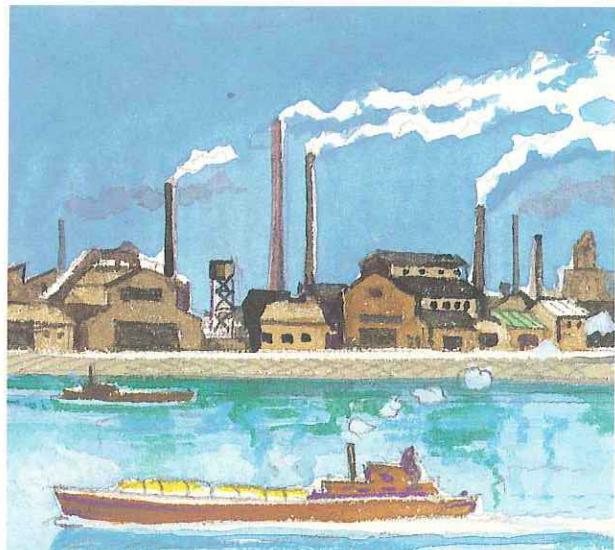
大正から昭和へと人びとのくらしが豊かで便利になりました。治水工事により水害が少なくなりました。水力発電によって家々には電気がともり、近代化のシンボルであつた電車も増えました。川の下流地域には工場が立ち並び人口もふえ街も大きくなりました。

例えば現在の荒川の開削は、明治43年の洪水をきっかけにはじめられ大正時代をまたぎ昭和5年竣工という大工事でした。水害の多い荒れ地だった荒川の周辺は、工業用水にも水運にも恵まれた安定した土地となり、その後東京の代表的な中小の工業地帯として大発展をとげました。

利根川や、淀川、さらに筑後川、木曽川、北上川、信濃川など大河川の初期の治水工事が、次々と竣工したのもこの時代です。

それぞれの地域の発展や人びとのくらしに大きな恩恵をもたらしたのは言うまでもありません。

川は人びとのくらしや産業の発展を支え続けているのです。川なくして人々の生活も国の発展もありません。河川整備は、国の発展と人びとのくらしを守る事業として現在も休みなくおこなわれています。



あそびのコーナー



ヒント
可に「イ」がつけば
何んだつけ?
フフ……

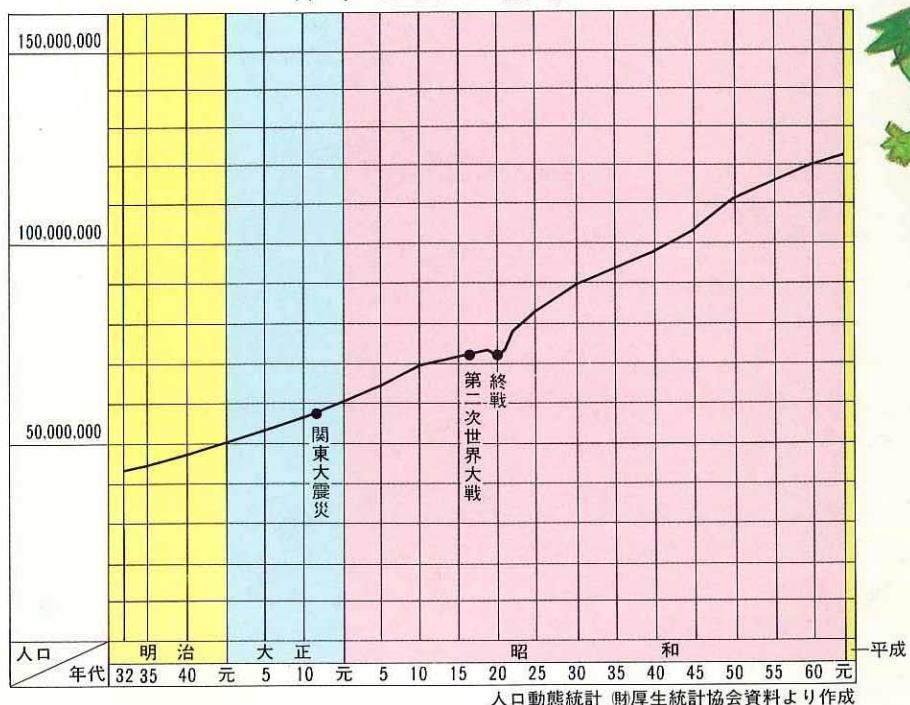
[問題]
右の文字には共通するところがあります。さて、何でしょう。

あまり意味にこだわらず、ヒントを見て、別の文字にしてください。

また、できた文字全部から連想できるものはなんでしょうか。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 工 | 皮 | 竜 | 谷 |
| 可 | 永 | 青 | 共 |
| 尺 | 魚 | 先 | 定 |
| 炎 | 原 | 州 | 弱 |

日本の人口推移



(地域の範囲)

- イ) 明治32年～昭和19年：樺太を除く旧内地（北海道、本州、四国、九州及び沖縄）
ロ) 昭和20年以降：前述の地域のうち、北海道の一部、東京都の一部、九州の一部及び沖縄を除く地域
なお、後年我が国に復帰した地域は、その都度以下により地域の範囲に加えた。

| 地 域 | 復帰年月日 | 範 围 に 加えた年 |
|------------|-------------|---------------|
| 鹿児島県大島郡十島村 | 昭和26年12月5日 | 昭和27年 |
| " 奄美群島 | 昭和28年12月25日 | 昭和29年 |
| 東京都小笠原諸島 | 昭和43年6月26日 | 昭和43年 |
| 沖縄県 | 昭和47年5月15日 | 昭和48年 |

答え

どの文字にもさんずいがつく（江 波 滝 浴 河 泳 清 洪 泽 漁 洗 淀 淡 源 洲 溶）

連想するもの……………川

河川環境管理財団は
みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

- * よりよい水辺のプランニング
- * 楽しく安全に遊べる川づくり
- * 川をきれいに、川を愛する心を育ぐくむ運動
- * 未来の水辺を考えた調査や研究
- * せせらぎ・ふれあい基金

監修 建設省河川局

財團法人 河川環境管理財団

(〒160) 東京都新宿区新宿5丁目17番5号
TEL. (03) 3200-5677(代表)